忘れられた明治史

2

忘れられた明治史

村　毅

明治文献

忘れられた明治史 2

昭和四十九年一月二十日 第一刷発行
定価 八五〇円

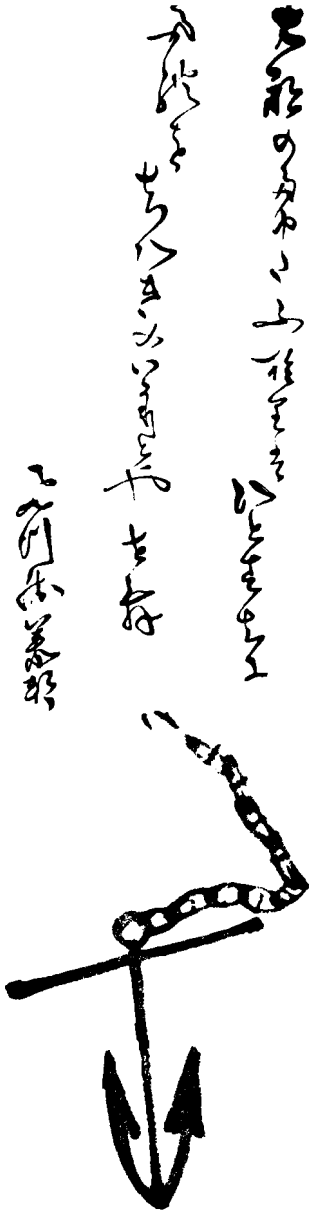
著者 木村毅
発行者 藤原正人
発行所 株式会社 明治文献

一七一 東京都豊島区池袋二―一〇七〇
電話東京(981)〇五二一(代表)
振替 東京三六二九〇番

乱丁・落丁のものはお取替えいたします

致しました。
了解により省略
検印は著者の御

印刷・㈱文献印刷 製本・昭栄堂製本
©K.KIMURA Printed in Japan
0093―000302―8309



▲勝海舟自画・筆▼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

忘れられた明治史　2

序

人には、ひとりでいても、相棒をおいても、評価のちっとも変らぬ型もある。そうかと思えば、適当な相棒とならべて二人にすると、価値が倍加して、仰いでいよいよ高く、望んでいよいよ広くなるような人も、稀にある。西洋でいえばイギリス立憲政治の花とたたえられたグラッドストーンとディスレェリ。わが国では日露戦争の時の満州軍の総司令大山巌元帥と、全総参謀長児玉源太郎大将がその好例。そしてここに取りあつかった西郷南洲と勝海舟は、それらより、もっと適切な一対だ。

私は、幼い時から西郷好きだった。ところが学生時代に、明治史を読んでいる

と、実際は文化的に云って西郷より大久保の方がはるかにエライんだと評伝してある本を読んで、その異説にびっくりしたものだ。そのころは、そういう評価は珍らしく、或いは少なかったので、天の邪鬼の私は何んでも異見少数者の方につく習慣があって、しばらく大久保偉大説の支持者だった。

ところが第一次大戦ごろから世の中が、だんだん変り、賢い知識人が一ぱいになってくると、今度はみんなが大久保偉大説の信奉者となり、それが社会通念になってしまった。少数説支持でおりたい私としては面白くない。早稲田に入って、池辺三山の名著『三大政治家』を読んだ頃から、又だんだんに幼い頃からの西郷好きにもどり、ことに明治時代の最高の哲人であり、批評家であった三宅雪嶺博士の諸種の西郷評を読んで、いよいよ西郷をより偉大なりとする私の信念は固まった。

それを伝記小説にまとめてみたのが、本篇で、支那事変中、講談社発行の雑誌『現代』に連載せられた。もとの題はただ「西郷南洲」というのであったが、わり

あいに歓迎せられ、出版社も四度かわって、中には「達人南洲」となっているのもある。

この「大西郷と勝海舟」という題は、今度の出版社の明治文献からの提案で、NHKテレビに「勝海舟」がかかり、海舟ブームが起る形勢のあるのと関係があるらしい。内容から云って別に差し支えないし、私はそんな事は一こうに気にせぬ方なので、同意した。

終戦になると、拙著中、第一に復活出版したのはこの作である。時勢が滔々としてアメリカ化するのに、いささかでも抵抗の気を示したのだ。

そうすると、二、三年たって鹿児島市から、南洲翁の七十五年忌にあたり、久しぶりに記念祭を催すから、講演に来てくれとの交渉を受けた。

「とんでもない。それは徳富蘇峰先生にでも頼まれたがよい。僕のような青二才では、とても、とても」

と云って辞退すると、いや、この人選に、いろいろな人の南洲翁伝を読んで、

検討したが、貴著が一番、鹿児島人の気に入ったから、頼むのだとの事で、汽車の事情は悪いし、飛行機はまだ通っておらぬ時だったが、とに角重い腰をあげた。

そうすると上は鹿児島出身の陸海軍大将や大臣や議員官吏から、下は謂わゆる車夫馬丁まで、そして遠いところは、北海道、ハワイからまで、この久しぶりの墓前祭に馳せつけている人がある。ちょっと聖書にある「過ぎこしの祝」のように、たくさんの人がもどってきたのだ。私は郷土の人からこれほど慕われている人が、世に又とあろうかと、思った。

そして又、私の講演が気にいったと云って、全市をあげて歓迎せられるので、私もそれに甘えて、みんなで五日ぐらい滞在した。その間、鉄砲伝来の種子島に、その領主の正系の子孫で、早稲田の史学科出身の種子島時望君（旧男爵）をたずね、島中を案内してもらった愉快さは、なお記憶に鮮やかである。

今も、それらの時のような魅力を、この書がもつか、どうか、おぼつかない。

しかし、テレビで勝海舟をみる人に、何か変った意義、あるいは関連した興味

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

を誘発することが、少しでもあってくれればいいがと衷心から念じている。

南洲や海舟のような人は、異なった光に照らしてみる度に、誰れでも異った価値を発見する。

昭和四十八年十二月十一日

木村　毅

大西郷と勝海舟

日の丸縁起

江戸の海

何しろ口からさきにうまれたような江戸ッ子である。

「やッ、さすがは花時の雨だ。ふるにも、ちゃんと心得てやがらあ。」

と、てんでにその朝の天気を祝福したことであろう。明け方はたしかに板庇や庭の立木に、無数のつぶやきのような雨滴の響が聞えていたのだが、それからまた一寝入して今度おき出て見ると、降つた名残りは往来の土がしめつているばかり、空はあちこちに二団三団、羊の毛を丸めたような雲をふんわりと浮べながら、薄緑に晴れあがつている。

それでも沖は鉛色の靄と、石版をひろげたような色の海水とが抱きあつて、何となく憂鬱そうであつたが、日が照りだすと共に、それも晴れ渡つたので、芝浦から品川へかけての海岸は、昼前になると、急な人出で埋ずまつた。

——と云つてそれは何も汐干の客ではない。今日この沖合に入つてくる予定になつている薩摩の新造艦昇平丸を見物しようというのだ。安政三年二月十八日のこと。

なぜ昇平丸に対して江戸中がそんなに騒ぎ立てるのかと云えば、これはこの日本において、しかも日本人の手によつて初めて作られた西洋型の軍艦であるからだ。

もつとも、ただ軍艦というだけなら、彼等も全く見知らぬというわけではない。おとどしも去年も（嘉永六年と安政元年）アメリカの黒船が浦賀をおびやかし、更に測量のため、お膝元の江戸湾まで乗りこんで来たのに、どぎもをぬかれた経験をもつている。

そのくせ、そうして目と鼻の先を右往左往されながら、江戸ッ子という奴は、存外しみじみとは黒船を見ていないのだ。それはうかうかと外をあるいていれば、大筒小筒を打ちかけられる心配があると思つて、戸のすきや、壁の影から、こわごわと、かい間みたのに過ぎないためであつた。

今度の昇平丸は、そんなぶつそうな異国船ではない。同じ日本の船なのだ。飛道具を放ちかけられるおそれなどは、毛頭ない。

それにあの黒船渡来のみぎりは、いざという場合、こちらに対抗のできる大艦巨船のないことが、甚だ心細く、また情なかつた。幕府が鎖国を強化して、各藩に大きな船の建造を固く禁止していたための国防的欠陥である。今度はその禁が解け、たとえ今のところただこの一艘だけとはいえ、とも角も西洋型の軍艦が、日本の海上に浮んだという事は、何としても心丈夫なのである。

江戸ッ子はそこが嬉しい。だから、きようの盛んな人出は、彼等が代代もち前の、単に物見高いというばかりではなく、昇平丸の入港を大いに歓迎するという気持も多量にまじつているのに違いなかつた。

まだ沖合に、それらしい影が見えそめもしないさきから、子供のように、ワア、ワッと盛んな歓声をあげている。赤羽橋の火の見櫓などは、下からてつぺんまで、人で鈴なりになつていた。

新造船

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.